

袴をつけるのであります、袴の附け方、一つ身の時とおなじ事ですから省す

小さき日記

(三十三年七月生男子)

印 東 音 鳴

二十三日。四五日前より來りし下婢を嫌ひ、顔を見る毎に(バィ〜)と大聲にて叱り(ス〜)と手にて押す形を爲す。

二十九日。親戚よりお歳暮に靴を戴き、初めて履物をはく(タアタ〜)と喜び、はけども〜すぐぬげて仕舞ふ。坊は何歳と問へば、姉さんの眞似をして右手を廣げて出す。

明治三十五年一月。

一日。炭を食べ口を眞黒にす。馬大好きにて婆や

に負はれ、馬の美しく飾りて通るを見喜す。

二日。朝初めて庭を歩む、靴はさて。

味柑すきにて(ガン〜)と言ふ、丸のま、渡せば(カ、)と云ふ、皮をむけと云ふ事なり。

三日。桃太郎の話喜んで聞く、わざやわ〜と赤チヤンが生れてと云ひしに(ニヤア〜)と眞似す。

四日。乳呑まんとして(アタ〜ト、クント)といふ。

お茶がすきにてお茶とお湯とある時には、必ずお茶でなければ承知せず。

桃太郎さんは何と泣くかと問ひしに(ニヤア)姉さんとはと云へば同じく(ニヤア)。

六日。日本一の黍團子と云ひしに、お重を爲す與へる眞似をせしに食べるまねをなす。

手にしもやけ出来居り（イタイ〜）といふ。

近所の子供の泣くを聞き（アー）と真似る。

十日。（あぶ〜）と云ふ故、鐵瓶の湯を注ぎしに首を振り、土瓶を指さす、土瓶のを注ぎしに未だ茶を入れざりし爲、氣に入らず泣く。

十一日。蝦を見て姉さんがゑびと教へしに（エビ）と云ふ。

毎日夕方食事の時かかゆ食べかけて（ポー〜）と悲しき聲して母の膝に上る、又（わか〜）と云ふ事もあり。

ポーとは工場の笛にて、食事の頃鳴るなり、アカは犬にて。抱かれたき爲の口實ならんか。

十三日。寐床に居りて姉さんの昨夜頂さし味柑を嬉れしげにかもちやに爲し居りしを見つけ、床をはい出し姉さんの床へ押かけゆき、遂に取り、に

こ〜して歸へる。

食物其他氣に入らぬ事は（イカン〜ス〜）と打つまねをす。

ポンブ（裸イッダ。アッコ。アコン。オクンナ（くれ）など云ふ。

婆ヤの氣に入りの時は（バーバ〜）とやさしき聲にて呼び、氣に入らぬ時は（ババー〜）と大聲にて叱る。

十八日。夕飯の時魚の脊骨をつかみ（オンマ〜）と喜び御飯を食べさす。

二十一日。婆やに負はれ知已の家へ行き、味柑を貰ひ眠りて歸へる、背より下るせしに眼さめ、しきりに兩手を眺め泣き出す、眠りし間に味柑落せしならん。